

## 被爆者の生きざま

小峰 秀孝

### ①原爆死とは

暴力で自然死からもうとも遠い死です。暴力死の具体的様相は異形の死です。原爆を浴びて人間の形状が崩れてしまうことです。人間は普通、死ねば遺体になるが、ところがもうこれが遺体とは言えない。なぜかといいますと、死体の上をまたぐ、けとぼす、踏みつける。なかにはまだ生きている被爆者が水を求めて足などにぶら下がりまると、その手をはらいのけて、ひどいになると蹴飛ばして逃げる。これはもう、まともな意識ではないということです。

もう一つ、遺体は遺体はいわゆる、物にすぎないということです。どういふことかと言いますと、あなたとか私とか、君とか、そういうた呼ばれる主ではないということです。それに、無記名の死、男か女か分からず、大人か子供かの区別はつきません。でも子供の死なのか他の動物の死なのか、区別がつかない。中には、自分の子供の骨とおもって拾った物が、なんと「なんじゃ、これは」そういった焼け跡の笑えない冗談もあつたものです。最も醜い「こい死に様」というのは、犬にかまれるという現象が起つたのです。例えば、8月17日、野犬に襲われ、死体や、動くことの出来ない被爆者を食いちぎる朝もやの中で、凄まじい光景を、地獄を、またもう一人の少年は、夜の闇間に遠くから死体の骨をかむ、カリカリという、不思議な不気味な音が聞こえたなどと証言されています。そして目の玉カラスにくり抜かれる人、結構居たんだそうです。広島に被爆者も、いわゆる火傷があつた人、全ては言えることですけれども、火傷の後に蛆がわくという現象が起るんです。なぜかこれは、100%蛆がわいた人だそうです。なぜか、薬がない、医療器具がない、そして看護婦、医者がいない。

おまけに、浦上そのものが崩壊してしまったんです。そういった社会現象も関係して、その蛆がわくという現象が起こったのです。そして、かろうじて生き延びることがする勇氣すら湧かない。

またあべこべのままなんです。自分のお母さんがあまりにもすごい死に方をして、その人をひっくり返して、お母さん出来た人々は、冒涇死によつて、そんな惨たらしい死によつて死んだ人たちは、あまりの惨さに、例えば自分のお腹を痛めて生んだ娘さんをひっくり返して、死体はもう炭化していますからね、ひっくり返して確認の顔を確認する勇氣が湧かない。その場を逃げた、これは、このとき十六歳の少年です。彼は今でも、そのころの親不孝を本当に思い出すんだそうです。そしてそんな極限状態の人間にはもちろん、にはなりません。その中で被爆者か、その後の生き方、どんな生き方をしてきたかというのは、そんなにすごい死をしてきた人達の、あの時、お父さんと姉さんと、子ども達とそんな惨い死を、一緒に死んでやれなかった、いわゆる当時死んでいった被爆者を敬うこれが、今、息のしてらっしゃる被爆者の方々のほとんどかは考えられたことだろうと思います。これは高橋先生が書かれた『命の証』の中の一説なんです。

みなさん、平和資料館の中に行かれたことありますよね。私の家は原爆中心碑から北の方角一・五km離れた所に西郷狩股で生まれまして。今は西町、音無町。もうずいぶん昔の名残はありませんけれども、ここには九件の農家があつたんです。畑あり田んぼ有り、そして高い山があり、その九軒の中でも、わたしの家はもう一山越えた、一番深い山の中に、それこそ一軒ぼつん私の家があつたのです。電気もガスも水道ありません。祖父、両親、子ども、みんなで八人の家族構成だったんです。この九軒の農家でも、家の中に居た人たちは、ほとんどやられました。その中で、約十五名が亡くなりました。中には両親が亡くなった家族もあったのです。わたしの家も、わたしと祖父が外に居たために祖父は右肩や手首まで、たったこれだけ火傷してましたけどね、一週間後にのどがこんなに腫れて亡くなりました。わたしは両手、腰、両足を火傷してしまつたんです。十一時二分、こんな丸坊主、小さい体、おまけに飢えた体で、下着一枚着て、そしてわら

草履を履いて、わたしの家はびわとかみかんとか、果樹園だったんです。びわの木に登ってこの時間帯、せみを取ってたんです。いつもおふくろが、飛行機の音が聞こえたら、すぐ防空壕に入るように言われていた。みなさん、防空壕、存知ですかね。あの家の防空壕、家で作った奥行き十メートル位の、そして大人がちょっと頭を下げて入れる入り口が、板とかトタンで囲ってあるんです。そんな作りをしていたんです。

このたった一機飛んでくる飛行機、ものすごくせみが鳴いて聞こえませんでした。多分、ぴかっと光っただろうと思います。次の瞬間、爆風で畑の中に叩きつけられた。しばらくすると、辺りが薄暗くなってきた、夕方のように感じました。だんだん怖くなる。あんなに鳴いてたせみももう、全然鳴かない。ただ遠くで稲妻みたいな異様な音や光がするのです。怖くなって、家までは走って帰りました。家に着くと、もちろん家はべしやんに潰れていました。おふくろが額から血を流して前を真つ赤に染めて、私には弟が居たんです。その当時一歳だと思っています。彼が家の下敷きになって、おふくろが気が狂ったみたいに「くりひろ、くりひろ」と探しているんです。ずっと後になって「母ちゃんこつから血を流しとつたら」おまえよく知っているなというくらいに覚えてるんです。わたし、父に抱かれて防空壕に避難しました。もちろん素っ裸です。そこで初めて自分が火傷をしていることに気が付きました。熱いとか痛いとかって、そんなもんじゃないだと思えます。ただ、だんだん意識がなくなります。その中で、はっと自分のお腹を見てみると、ピンポン球くらい大きな水ぶくれが出来るのを、たぶん足の方もそうだろうと思います。今でもしつかり覚えています。

後に父が「お前はもう、腕の中で暴れてどうしようもなかったし、置くわけにはいかんし、下に置くと今にも死んでしまっそうだから、兄ちゃんとか母ちゃんと代わる代わるに一晚中抱いていたんだ」痛い痛い、熱い熱い、といって、そしてものすごく防空壕は通風が悪く熱いし、習字すぐほつたて小屋を作ってもらって、そこでわたしと祖父は寝せられるんです。火傷は必ず皮が剥けます。次に必ず被爆者全員に言えること、化膿するんです。しかも、粘着性がある。膿がこびりついて、中々取れないんです。だいたいその当時、ただ一つだけ、異常に発生したのはハエでした。したがって、生きている人間に、化膿しているものだから、ここに卵を産んで蛆がわくという現象が起こ

るんです。これが少しじゃないんです。父の話では、それこそ目や鼻や口に入らないようにするので精一杯。そんな中で、お腹に蛆が食い込むんです。火傷の個所が少しなら痛くないでしょう。しかし前全部ですから痛いんです。端を何本も束にして突くような痛み。激痛なんです。四歳八ヶ月の子どもが何を考えたか。多分、一分一秒でも、この激痛から逃れたい。多分そう考えたと思います。「おいば殺しておいば殺して」と父が後になって、お前は大人のようなことを言っていた。そう言っただそうです。だいたいその痛みで気が付きます。

避難してきた被爆者のほとんどの人達が鼻血がでて、歯茎から出血したり、吐血、下血。髪の毛は完全に抜けてしまっています。おそらく、ほとんどの人が、着の身着のまま逃げてきている。勝手によその山をほじくって防空壕を作ったり、小屋を建てたりして生活するんです。その中からも、のすく体がだるいらしい、そして紫色の斑点が体に所狭しといっぱい出来ます。はつきり言って化け物です。そして、だいたい十―十五日、腕なんかこんなに細くなって、またおまけに皮下出血、外にはでませんが、ほとんど紫色、のたち回って、苦しがつて死んでいくんです。それだけ尋常じゃないんです。ほとんど死に至るまでいなくても、髪は抜けて、歯茎は出血して、紫色の斑点が出来る。だからですね、みなさんほとんどの人、いわゆる「専心恐々」いつ自分に降りかかってくるか分からない。そんな中で、わしだつて同様です。四歳八ヶ月の子どもが考える。「これだけ悪かったら死なんわけがなか。必ず死ぬ」思い込むんです。

たまたま10日くらい経って、やつとこのわたしの部落にも救護班が来たんです。わたしは、親父に、連れられて救護班の所へ行っただです。そして、そこで、わたしの番になりました。そうすると「お宅のお子さんは体を半分焼いているので、多分助からないでしょう」と言われましてね。多分油でしょう。それを火傷の上に塗られて、そして帰されました。行く時は、久しぶりの小屋の外へ出たので、世間が珍しいから、頭が3倍くらいにふくれてほとんど裸ですから、手なんかどこに生えているかも分からない。そんな体の分からない遺体がまだ山ほどあるんです。目とか鼻とか口に蛆がわいてる。もう帰りは見れません。「やつぱり死ぬのか」そう思いました。死んでいるのはいい見えます。でも、死ぬまでのプロセスというのは分からないんです。どんなに苦しんで死ぬのかというのは。だから、どんなにして死

ぬのだろうかと思いました。

火傷は少しづつ治っていますが、火傷の跡はケロイド状になってしまいました。わたし、パンツの部分だけは火傷してないんです。當時は七mか八mですけれども、身長が伸びるにしたがつて、今はやつぱり一・五cmから二cmくらい、いわゆる道が通っている、もつと言ひ換えると地図腹になってしまいました。特にこの右足、これはもう最悪です。ここに火傷の跡がだんだんこう盛り上がるためには、それからですね、どこまで曲がつたら、曲がり終えるんだろうか。毎日毎日曲がります。痛くはないんです。親指はまともですが、あとの四指は上へ上へと曲がります。かかとは平常ですけどね。こう、足の腹のところ、ここが異様に膨らんでいます。もう到底人間の足とは思えないんです。必ず足首を伸ばすと、だいたい三〜四cmくらい、いわゆる山なんです。その中心が必ず裂けます。あんまり痛くはないんです。どす黒い血が流れます。靴下も靴も、もちろん靴なんてその当時ありません。売ってもないんです。だから、全ての履物は履けません。父に作ってもらったわら草履を、前と後ろとくくって、そして伸ばして歩く。こう曲げないために、左側に右足をひきつけて、いわゆる横歩き。けつこつ、これしんどいんです。

わたしも昭和22年、やつと学校に行くまでになりました。学生服を買ってもらった。もちろんその頃、長崎には多分かばんなどはなかったと思います。代用品で母に作ってもらった。一m二十cmの袋を作ってもらった。その中に学用品を入れて、たすきに肩からかける。そして杖をついて、もう何年か振りかたで山を降ります。降り立った西浦上小学校というところは、九百人くらいの生徒数だったんです。だから山を降りると、ほとんどわたしは通るんです。みんなわたしを見て笑うんです。中には笑う子も居ます。その時、いかに自分が滑稽なのか、やつぱり恥ずかしいんです。「お父さん、帰ろう」父は帰ってくれませんでした。またそれはいいんです。それは、精神的な面であつて肉体的な辛さというのはね、冬、この温暖な長崎でも雪が降ります。そうすると、わたしの小高い山の上にも雪はよく積ります。ましてや小さいですから、あさから学校行く時にはね、膝小僧まで雪にぶすつと入ってしまうんです。

わたしの家から小学校までいたい一・二・三・k mあると思うんですけど、普通の一年生で、四五分〜五十分かかります。わたし、雪が降る時なんかもう、下手すると、一時間くらいかかるんです。だから朝早く出ます。雪の中をすべったり転んだり、やつと農道に、そして石ころだらけのこぼこだらけ、その中を、もう足は靴下を履いてない。手も足も、完全に感覚がない、痛みがないんです。学校といつても、そんな上等の学校じゃないんです。外側は原爆のすすで真っ黒なんです。ガラスなんて一枚もないんです。板が押してあるだけ、教室はだいたい1クラスに五十人くらい居るんです。もう後十分くらいで学校に着くなんて思うと、何でしょうね、悔しいとか分かりませんが、やたらめつたら涙が出てくるんです。そして自分が戻ってきた後を見ると、わらわ履がどす黒い血をいっぱい吸ってしまつて、学校に着くかどうか。板張りですから汚しちやいけないので、学生服を机の下に敷いて、そして感覚のない足を両方入れて、上からたたんでね、そしてじいっと感覚の戻るのを待つんです。なぜそうするか。何も、板を血で汚そう、そんなこと考えていません。

ただ、今よく考えてみると、あれ、辛いんですよ。いつまでも、あのじんじんじん痺れて、あれがだんだんだんだん回復していく時に、あれはものすごいかゆみを伴うんです。もとに戻るのに、だから急に「ぼつ」と戻る方がいいんですよ。今まで2回、寒い日の中で、足をそうしたことがあるんです。三回目はね、あの大久保先生、女の先生が居ましてね。「何で小峰さん、もつと早く教えないの」泣かれましてね。昔は宿直室であつたんです。当番のおしさんが居りましてね、夜学校の管理をする。そこには畳があつてね、何らかの暖房器具があつたんです。あと、ほとんど1年生の冬の後半は、そこで1校時は過こさせてもらいました。でもほとんどね、雪の降らない日は霜柱が7〜8 cm立ちました。やつぱり出血するんです。ただ、滑らないので用心して歩けるといのがちよつとましでね。雪の日のようにひどくはないんです。もうその頃はちよつど八畳くらいに八人の人間が、互い違いに夜は寝るんです。そしてすぐ横にはね、いわゆる内職を両親がするんですが、金がないからね、冬えらく寒くなると、足がずきんずきん痛むんです。



外を見るとね、また雪が降っている、掘つ立て小屋ですからね、外がよく見えるんです。両親のところに行つて、野良仕事のところに行つて、わらを叩いてむしろを編んだり、わたしたちの履く草履を作つたりしてゐるんです。そこに行つて「母ちゃん、明日雪が降りよるけん、学校行かんてよかる」怒られるつていうこは分かつてゐるんです。それでも本當に行きたくないんです。「母ちゃん、いじめられるし、足は痛かし」というと、母は「我慢して行かんば」と言ふんです。横にいる父が「また豊は、そんな分かんことを言つて」と言ひましてね。わたし、牛を飼つてたんです。その牛小屋の二階に、わらがいつぱいあつて、あれめ農家にとつて、本當に大事なものです。その中に「ぼん」と入れられて、梯子をはずされてもう帰れない。わら布団なんて、そんなかつこいいんのじゃないんです。隙間風は入つてきて寒いし足は痛いし。やつぱりね、母が來てるの分かるんです。やつぱりね、父も寝てないと思ふんです、あんな時。2回ほど、牛小屋に入られました。本當に学校に行くのが辛かつたんです。

でもわたし、いま考へてみると、あの當時、當人のわたしよりも精神面では両親の方が1着しかないんだから、もう木曜、金曜日くらいになると、血で背中がべとべとなんです。毎朝は母が縫つてくれる。でもね、鉄が錆びたような、甘酸っぱいような、何ともいへない臭いがあるんです。布団の中も一緒なんです。しもやけすると、ちよつとかゆくなる。かゆくなるので、爪を立ててかきむしるので、かいた後で血がついてる。ひりひりひりひり痛いし、中々治らない。そんなことのくり返しなんです。

そんな中、両親が、もう思い余つたんでしようね、長崎の親戚中からお金を借り、それでも足りなくて、佐賀のおばさんからもお金を借りて、二年生の夏休み、一回の手術を受けさせてくれました。これでまず、いじめられなくて済む、遠足もみんなと一緒にに行ける、そして運動会も走れる、もちろん、走つても1番端つこだったんですけどね。でもその時はね、思ひました。あれ、大変辛い手術だったんだそうです。そのケロイドを取つて、外太ももの皮を剥いで、縫ひ合わせて、こんなに曲がつてゐる指は、機械的にぐつと伸ばしましてね。1番痛いのはですね、爪のところに穴をほがして矯正するんです。なつかなかきつい手術です。それで出た時は「手術出来たよ」泣きべそか

きながら見るんですけどね。縫い合わせてあつても、やっぱり一応人間の足の形をしている。結局、二回手術したんです。でも、ケロイドは10回手術しても治らないでしょう。わたしの先輩に、谷口すみでるさんっていう人がいます。今もね、しゃきつとしていらつしやいます。背中がね、ものすごく楽になった。彼、この間聞いたら、二十回以上手術したけれど、もうあんまり出来ないみたい。何でそんなにしゃきつとしている。彼は言うんです。背中全部火傷していて、1キロ太つても痩せても眠れない。皮が引つ張り合つて。だからいつもまっすくしゃきつとして歩かれます。彼は、映画のようにきどつて歩いているわけじゃないんです。そうしなくちや生きていけないから、彼はやつている。私は8回しましたけど、一回目のとき「明日の朝が手術ですよ」とつという時、主治医の先生が「写真とつておこうか。」ネガが資料館にうまいぐあいに残つてしまつてね。三回もしてもらつたんです。でも、今も一つも変わりません。今も親指は地面についていますけど、後の指は宙に浮いたままなんです。三年のとき、これはジョークなんですけどね、頭に一番残つているジョークです。廊下を休み時間に他の子どもたちと一緒に歩いていました。向こうから若い先生が来て、「小峰、おまえどうしてまっすく歩かんとか。まるでがれのこ」とあるやつか。」二寧に先生は私の歩く真似までなされた。そこに居合わせた生徒達は「きゃー」と騒いだり、笑つたりします。私だつても二年生。恥かしいじゃないですか。はつきりいつて悔しいし、その先生も憎い。涙もぼろぼろ出るんです。そのとき、「あ、被爆者が生きるつてもしかしたら大変なことかもしれない」思うようになりました。一番最初についたあだ名は「腐れ足」だれがつけたのかは知りません。その次に「トビの足」。とうとう三年生になつて、先生から「ガネの足」三つのあだ名をつけられました。「いじめ」「差別」「偏見」これらは私だけでなく、全ての被爆者に言えることなんです。

様々な学者、被爆者、いろんな方々が長崎あるいは広島に来て、「原爆がどの高さで爆発したか」「放射能がどのくらい残つているのか」「放射能が人体に及ぼす影響はどのようなものか」そんなものがどんどん研究されていくんです。そんな中で、特に医学だけいいよと、始めに言いましたように、急性白血病、放射能による病気。その次に甲状腺癌は皆さんの十四倍私にかかるんです。そして、私達被爆者が最も忌み嫌われ、疎外された要因が遺伝です。被爆者と結婚すると健康な赤ちゃんが生まれない。そして、とうとう最後は「原爆はうつる」



伝染病あつかいになった時期もあつたんです。そんな中で、最もつらかったのが第三国の人。これははっきりいって最悪です。人間よくもまあ、あえて生きていけるな。我々だって学校に持つていく昼食、弁当ですね。米が80%、麦が20%、残りの20%は芋です。たまにこ馳走があるのは、イワシとかサバとかアジとか魚です。塩焼きとか煮付けとか。これはもう最高の馳走です。なかにはそれすら持つて来れない。芋だけ持つてくる。じゃあ、第三国の方はどうしたか。あれ、こじきです。そこら辺にあるものをひろつて。ま、常識のある人が何かしら物をくれて、橋の下、大小の防空壕に生活してたんです。着るものはボロボロ。おまけに貧血、脳溢血でね、顔に火傷があるような女性の方はいもう、これ最悪です。我々はね、それでも石を投げるんです。そんな、いわゆる被爆者の生活は十二年間続くんです。原爆が落ちたその日から。原爆医療法もやつと昭和三年に国がつくつてくれました。それでは、例えば阪神大震災のときは、翌日すく、衣食住は確保できます。ボランテニア・国・他国からの援助。我々はね、この二年間ね、広島も長崎も何十万もの被爆者、米一粒だつてもらつてきてないんです。

放射能を浴びた体でほつたて小屋をあちこちに造つて最低限の芋とか麦とか簡単にできやすい物を作つて。そしてその頃、大工場もないわけですから。その頃一番にできたのが住宅、市営の住宅。それを、大工さんのこどり、しゃんさんのこどり、それも今日一日働いたら二度と働けない身体になる。そんな中で大勢の被爆者が自殺を試みたんです。どの位の成功率かは分かりません。私の部落でも二名の方が自殺して亡くなりました。そして、私はだんだんいじめられ、エスカレートします。小学校一年生のころのいじめなんてかわいいものです。三年、四年、五年になると敵もさるもの。悪知恵が発達します。昔は授業の終わりにカンカン鐘が鳴ります。そうすると真つ先に逃げるんです。一番安全なのは便所の中。これはめつたにはいることができません。次に安全なのが竹やぶの中。これもほとんどつかまりません。殴られる。なぶり殺しですよ、まったく。まったく、人です。四年生くらいになると、やられると痛いんです。やられる度に「足が治つたら絶対、仕返しをする。」それくらいしか自分を慰めることがなかったんです。

三年の時に先生に言われたんで、四年生の三月に約三ヶ月かかって、一回目の手術である程度ケロイドはなくなっています。まっすぐ歩くために毎日泣きべそをかくて血だらけになり、練習した。人間やつぱりね、訓練すると治るんです。まっすぐ歩けるまで三ヶ月かかりました。でも今でも身体障害者ですけどね。書くのがまたつらいんです。中学一年時に三回の手術をしたんですけどね。もちろん義務教育ですからね。三年まで持ち上がりですからね。みんなそのまま学年が上がります。転入か転出かない以上。中学三年までの年間いじめられたらたまらない。あと四年もいじめられたらたまらない。四年の秋、それこそ心臓が飛び出す思いで子どもを決闘に呼びました。それしかなかった。秋、表畑の中で勝てるわけがない。ほんと大きいのですから。防衛本能というんですかね。私は彼の胸のところに頭をうめて、殴られまいとしていましたけれども、彼が意地でも突き放そうとするんですから。私はちよつと彼を押ししたら、彼は本当に運がわるかった。三つ葉みたいな植物のつたにひっかつかつて、そのまま後ろに「ぼんつ」といったんです。彼は畑の中に半分ほど体が埋まって、もがけばもがくほど蟻地獄みたいに。私が踏ん張つてのつていますから。殴りました。拳骨で、もう四年間。クラスが違つてもありましたけど、本当に殴りました。言わないんです。昔の喧嘩にはルールがあつたんです。相手が負けた。いわゆる意思表示をすると止める。それがあのころの我々子どもたちの絶対守らなくちゃいけないルールだつたんです。それを守らないとその子は絶対つまはじきになります。昔たつたら番長同士で喧嘩をしてもけつこう仲良くなります。それはルールを守っているから。私もルールはまもります。殴ると歯が折れるのがわかります。やつと彼が、三年のときから私に「ガネガネ」言っていた彼が「小峰、もう止める」というんです。パツと私も止めました。ところが自分の心人が、彼らが親分がやられたとたん、石を投げるんです。私も興奮していましたから最初はわかりませんでした。それが一発が完全に無防備でしたから、「ポコーン」と当たりました。私は振り返つて「君達もかかってくるのか、あらんかぎりの声で叫びました。彼らがかかつてきたら勝つわけないですから。そしたら彼らも逃げました。私も目も鼻も口も、もちろん足からも出血しました。そして大切な学生服もやぶられてしまつて。でも帰る時は気持ち良かったんです。そして家に帰るとちよつと両親がいました。「ひでたか、その格好どうしたのか」っていうんです。「母ちゃん、おい喧嘩したとばい。勝つたとばい。」といいました。そうするとおふくろが「良かったね」っていうんです。私は良かったねって聞いたとき、「うちの母ちゃん、おいがずつといじめにあひよつたのを知つとつたとばい。」多

父、母の心の中には「家の息子はいつか自立して乗り越えていくんじゃないかな。」とおもったんだろうと思つんです。「あ、ここでやつと自立することができた。」そう思つたんだろうと思つんです。

でも、その頃、学校では疎外され、いじめられる。家ではむやみやたらにいい子を演じました。そして、学校の反動だと思つんですよね。学校の行き帰り小動物を捕まえると、石でたたいたりして、とかげだつてカエルだつてグチャグチャにして殺すんです。田舎ですからね。猫や犬がきてニャーニャーとかキャンキャンほえます。それを捕まえてきて、両の足を紐で縛つて、石でくくりつけて、川か水のあるところに持つていつて、投げ込みます。そんな少年だったんです。そのくせ、家ではまず、強制的に牛を飼わされます。田舎は自給自足ですから。家では特に鶏を、その頃の卵つて言うのは貴重だったんです。そして、私個人、ウサギを飼っていました。そんなひどいことをする私がウサギを買っていました。ダンボールで入り口を作つて、そこにわらをして、買っていました。ウサギが赤ちゃんを産みました。あれがもうかわいいんです。少し行くと振り返りました。少し行くと振り返る、そのしぐさが本当にかわいいんですよ。あるとき学校から帰つてくると、血が付いているんです。あれつと思つと、もつかみ殺されて真っ赤になっていました。そんなにひどいことをしていた私が、庭の畑をほじくつて泣きながらウサギの赤ちゃんを埋めてあげました。後で父に「何で親ウサギが赤ちゃんを殺すか」と聞くと、父が「お前があんまりいじくるから、人間の匂いがついてしまった。だから、親ウサギがかみ殺すんだ。」本当かうそかは知りませんが、そう教えてくれました。五年のときだと思つんですけど、正月のご馳走にするから鶏を捕まえてこい、私が飼つてるもんですからね、野放しになつています。私がいくと、コッココッコ言つてよつてくるんです。だからなるべくなら捕まえずいメスの鶏を捕まえてきて、父がなたを持つて丸太のところで構えているんです。「ひでたかおさえとけ。」おさえてね、父が鶏の首をなたで切つてしまった。私瞬間に離したんです。首を失つた鶏は、バランスが取れなくなつて、そこら辺をはたはた暴れ回つたんです。それから私は鶏を食べていません。その頃になつて始めて物言わぬ動物にも生きる権利があるんだ。あの原子爆弾のときにも、大勢のそれこそ、犬や豚や牛や、それらの死体が人間よりも後で片付けられたんだ、そう思つんです。それどころか片付けられず、骨になるまであつたのかもしれない。原爆はそういう意味でもや

つぱり、あ悪魔の兵器には違いないんだと思つてます

私が中学校の頃は勉強がでなくて就職組みだったんです。なるべく将来一人でやれる仕事。なるべくみんなと一緒ににやらなくてもいい仕事。みんなと一緒にではダメだと思つたんです。一番最初に言つたのはすし屋です。すし屋のおやじから「うちは食べ物商売だから原爆にあつた人は雇えない」多分、すし屋のおやじさんは、原爆はうつるって信じていたんだと思います。住吉っていうのは小さな町だったんです。そこに小さな床屋がありました。そこに行くと「君がやるならいいよ」でもはつきり言つて両親や兄弟はものすごく反対しました。「お前が立ち仕事ができるわけがない。他の仕事を探せ」と言つて「いや、もう行くことにしたけんね」見習い生と言うけど実際はでっち奉公なんです。もつね、5年のでっち奉公、一年のお札を全部で六年間、右足ははれないんです。左足がはれる。はじめの頃は「もういやだ」何べんも家に逃げて帰つたことがある、家に帰るとまた「ほうれ見たことか、お前言つたやろうが」それでも国家試験に合格して一人前の美容師になることができたんです。十九の時です。これで一生くいっぱくれない。そう思いました。

その頃の一番の憧れ、それは異性です。私は見た目は被爆者に見えませんが電話はあります。でもはれると百%別れが待つています。そのときの口癖「どうせ俺なんか」が私の口癖でした。それでも二十四歳の春、十九歳のとき、また御丁寧に出会いがあつたんです。私はもう思い切つて言いました「私は被爆者はつてん付き合つてくれんか」彼女は原爆のことなんかこれっぽちも知らない、「いいよ原爆なんて関係ないよ」といつてくれました。私としては「やつた彼女ができた」本当、嬉しかったです。休みが待ち遠しい、夜が来るのが待ち遠しい。ダンスホールに行つたり、山に登つたり、そのくらいが関の山ですが、それでも楽しかったです。でもの月になつて向こうの親から一本の電話があつて、多分はれたんでしょね「内の娘とは付き合つてくれるな」そのときはね、俺が何をしたのか、いろいろの中に間違つて足を突っ込んでやけどしたならまだ仕方がない、四歳八ヶ月の何もしていない我々が何故ひがいに会わなければならないのか、そのときは本当に思いました。四歳八ヶ月の時にできた山、五年生のときは心臓が飛び出すような思いで、喧嘩までして爪を立てて登つてきまし

た。でも今回のふられたときは「もうどうなつてもいい」まず仕事に行かない、そしてご飯を食べても吐いてしまう。あの頃24歳のころと云うのは例えは長崎の大きなところに一流の店を構えるそついつた夢や希望を考えていた矢先ですから、もう最終的には「俺なんてどうでもなれ、俺なんか誰も必要としない」両親も俺がいらない方がお金がかからなくてすむし、ちよつと熱を出しても「ひでたか、熱はないか先生はなんて？」と白血病やガンの心配をするんです。そんな心配もしなくていいなんて頭の中真っ白になつて投げやりになるんです。その頃睡眠薬が店に行つても売つてくれない。たまたま家の店にお医者さんがいた。彼に嘘を言つて薬をもらいました。致死量まで聞いた。それを六月のある雨の降る風の強い日でした。覚悟はしてるのに手が震えてるんですよね口の中に薬をほおばつてあの頃結構大きかつた今は小さいですけどね、水を何杯も何杯も飲んで流し込みます。もちろん眠くなつてきます意識も朦朧となつてくる中でふつと思つたのが「おれが生ま代わるなら被爆者だけには絶対ならん」と言つことでした。すぐ病院に担ぎ込まれたんだと思います。気がついたら病院でした。怖い父がげんこつで殴るんです。昔はあれが愛情表現でした。キセルの先でやられるんです。母は顔をじつとみて「ひでたか、原爆に会つたのお前だけじゃなかる。原爆に会つたのもお前の運命じゃ。運命に逆らつてどうするとか。もう二度とこういうことはしてくれないな。お父さんも母ちゃんも兄弟も、お前が絶対あがんしたら育てんかった。」それはお袋たちは近所での自殺を見てきてるんです。昔は田舎で冠婚葬祭はやつたんです。知つてます。

その後でそくさと長崎を逃げ出しました。「月大阪、兵庫県で小さな床屋をやつてました。ある朝店の奥さんが「こみねさん、電話よ」電話に出ると、なんとあの親が反対した娘さんが、今大阪に家出してきてるから、むかえにつていうんです。私はびつくりしました。まだ一時間でした。行つたんです。大阪駅に、やつとの思いで探して当てるんですけど、「帰れ、なんべん行つても帰らない。」「じゃあしかたない」その足で大阪に帰ると、すぐ電話するのは嫌だからでんぼうで「彼女は私の知り合ひの病院に預けました」夕方になるとまた電報で返事がきた。「家出をするくらいなら結婚を許す」つて来たんです。一週間考えました。どうしても自分で結論を出すことができない。生きるか死ぬかの次のことですからそうすると店のマスターが「一寸先は闇つて言つことわざ知つてる？ 僕ら明日死ぬかも知れない。もしかしたら

88まで生きるかもしれない。でもこれはあなたに科せられた最後のチャンスかもしれないよ。」なんて言うんです。「よし、じゃあ、一緒になつてもいいか。いつどうなるかわからんとぞ。」

長崎に帰つてきてもう急でした。式場がなくて家でした。いわゆるその夜、私と妻が近所のホテルに泊つたんです。私はその時、人生の中で何が一番つらいか。あんなにつらくて、みじめで、あわれで、あんなことはありませんでした。裸で抱くことができないんだから。はつきりいつて、自分の横にやつといとめた、意中の人がいるのに。本当にその時だけは原爆を喰ひ、そしてアメリカをつらみました。『どうしてくれるんだ。このでこぼこで化け物みたいな体を。』どうすることもできないんです。時間だけが過ぎていきます。あの時ね、時計の音がいやに憎たらしく聞こえてきたんです。どうしようもないんです。とうとうばれます。彼女の大きな目がますます大きくなる。びっくりしたというような顔をしました。私のはつと彼女を見ると、肩が震えてるから泣いているんでしよう。「かんにんな」彼女にかけてやる言葉がいくら探してもこれ以上ないんです。ただ、「この人が明日、帰るといふのなら、何も言わずに帰してやろう。」ばかりにその晩、そればかり考えて、指一本ふれることなく、本当につらく、ながく、苦しい一晚でした。

翌日、彼女は帰らず、また大阪にきました。そこで彼女はなんとか受け入れてくれました。『6歳ですから、私に嫌われると、一人になつて心細いから』そう思つたのかもしれない。それでも翌年には待望の女の子が産まれたんです。「たかえ」つて名前をつけました。私はその時はじめて、妻のおながが大きくなつてきている。「お父さん、さわつてごらん。今ね、お腹を蹴りよるよ。」だんだん愛着が湧いてきます。その時はじめて、「一回だけ柏手うつて、元気で五体満足の赤ちゃんが産まれますように」拝みにいったことがあるんです。いよいよ、微弱陣痛で三日くらいかかった。長いお産です。産まれました。指を数えると五本ある。目も鼻も口もある。ちゃんと女の子だつておちんちんはついている。足の指も五本ある。感動しましてね。もつ涙がでるんです。そうすると看護婦さんが「不思議なおやしきやなこの人は。」と思つたんでしよう。じつと私の顔を見るから「看護婦さん、私ね、被爆者ですよ」と言つとね、あの頃は被爆者っていうの



を嫌ったんです。看護婦さんが「良かったね、五体満足で」といわれました。そしたら、赤ちゃんが産まれたとたんに、向こうの親も私の親も「あの馬鹿なれ。生活力がない」と思ったのか「さあ、長崎に帰ってこい、帰ってこい」言っんです。その頃、私の家の果樹園もほとんど宅地化が進んで、土地を二〇坪売るといような格好で結構お金を持つてたんです。「ひでたか、店をだしてやるから帰ってこい。」言っんです。私はそこまで言われて、長崎によろち歩きもできないたかよを連れて、今の家に引越してきたんです。小さなところなんです。でも私にとっては満足です。私は思春期の頃から、やつぱりよその親が子どもの手を引く張つて歩いているのを見ると「おれもあんな風になりたい」という願望もありました。でもなれないっていう思いもありました。現実になれたわけですから。そこまで行くには、「なりたい」というのはなかったにしろ、結果としてなれた。そして、それでもお年に待望の次女が産まれた。「さとみ」

お年、あんなに頑丈だった父親が癌で亡くなりました。明日、死ぬという時に、兄弟、親戚、全員が来てます。病室に来た私に「ひろばう、お父さん呼びよるよ。行つてみれば」病室に行つてみると、彼は個室で一つのベッドに寝かされて、そのベッドは死んでいくためにものすゝ効率良くできています。父はね、そのベッドに一番始めに寝かされる時にものすゝ抵抗しました。知つているわけです。このベッドの意味を。でも私が行つた時にはそのベッドに寝ていました。「こい」って細い手で呼ぶんです。手を握るともう冷たいんです。翌日死んだからです。私の顔をじつと見ていた父親が、なにを思ったのか「おまえが一番心配」っていうんです。真つ白な顔で、もつとうしていいのかわからない。もしかしたら、「おまえが一番にくたらしか」といったかつたのかもしれない。私が一番手をかけていたんでね。もつね、そのことを忘れるのに二年はかかりました。世の中には良い神様と悪い神様がいてそんなにつらいこともだんだん浄化して忘れさせてくれるんだな。一辺、お日も終わつた頃に、おふくろに「母ちゃん、父さんは俺が殺したんじゃないか。」私がやけどしたために、焼け跡から油やら薬やら必要なものは父親が探してきてくれます。おふくろが「この頃おまえの様子がおかしいと思つたら、そのことは考えよつたとか、このばかたれが。おまえのせいじゃなか。お父さんは運命で死んだ。寿命で死んだとやからもう二度とこんなばかことは考へるな。」さとさされました。

それから六年に待望の男の子が産まれたんです。「ひでひろ」何にも言うことはない。私は朝から新聞配りをしました。バスを誘導しました。それをするからお金が残るわけじゃないんです。気持ちなんです。ほんとに将来のことを察してやりたい。やつぱり、そのころ被爆二世で産まれた後も影響があるのかはつきりわからない時代で、そういった父親としてのハンデが子どもたちに対してありました。「なんとかして人並みのことはさせてやりたい。」

でも、一番上は6歳の歳、6歳のときに、今度はまた次の災難。妻が「別れたい」と言い出します。一番始め、この私の化け物みたいな体を見た時、結婚してからずっと妻に対してはハンデばかりです。被爆者であること、体にこれだけ傷があることのハンデ。そして、イジケた心のハンデ。ずっと引きずってきました。言い換えると、いわゆる「かかあでんか」でした。だからこの時も「頼むから別れないでくれ」とは言えないんです。「いいよ」と言わざるおえない。三人の子どもが残されました。皆さんのなかでも、大学生とはいえ、母子家庭、父子家庭、いらつしやるかもしれない。母親が子を育てるのも、父親が子を育てるのも一緒です。並大抵のことではないんです。その頃から、めつたやたらに一番上の子は私に背を向けます。二歳半の長男は一番母親が恋しい年頃です。十一時に仕事が終わって息子と添い寝してやる。私は右のおっぱいよりも左のおっぱいの方が四倍か五倍大きいんです。ありもしないおっぱいをね、息子がやたらめつたら探す。そして、こんな言葉は使っちゃいけないでしょうけど、母親がいらないショックのあまり、「か、か、かあちゃん」と呟るようになってしまった。そんなことをやられると、だいたい泣きました。ある日、熱がでて大変なんです。もう、「やつとほちほち熱がひくな」と思ってた寝ようと思ってもどこかをにぎってるんです。子どもってほんとにすごいんですね。にぎってるもんだから、話すとはっと起きて泣く。それからもう二晩も二晩も同じです。

ある日、仕事中にドアを少し開けて仕事をしていた。そしたらちやうど兄が来て、「なんだひでたか、こん子は。もう俺のとこ連れていく

ぞ。」兄には子どもがいなかったんです。私は二、三日連れていつてくれるものと思っていたんです。そして、電話で強制的に「養育費は一ヶ月に一回もつてこい」びつくりしました。つづじヶ丘までバイクで行くんです。そうすると腹がたつね、行けば息子が「お父さん」って飛びついてくるんです。そして「飯食べる時なんか私のひざの上に乗つてこようとするんです。乗せてやりたいんですよ。でもぎりの姉には子どもがいらないからそんなことできません。」「ひで君、ほら、おばちゃんのに所に行かんば。」帰る時にはね、もう見えなくなるまでバイバイするんです。泣いてくれるほうがまだいい。一生懸命がまんしてるんでしよう。もう本人の私がね、バイクで曲がった時、涙で前が見えないんです。家では姉ちゃんたちが待つてるから、涙を拭いて。晩御飯の用意せないかん。もういいから返してくれよ。どんなにっらくたつていいから。親子三人で生活したほうが気持ち的には楽なんです。でもやっぱり兄も今、返したら私の家族が崩壊すると思つたのか、とうとう小学校まで返してくれませんでした。

一番上の姉ちゃん、その学校の一番上の学年になってくる。はつきりいつて、生理用品を父親が買いに行くのは大変なんです。下着はそこら辺の下着売り場にくらでも売ってます。でもあれは冷や汗がでるんです。やつとの思いで買つてきて、置いておいた。後で考えると言うわけないじゃないですか、父親に。女の子が。一番目の娘が「下着がない、お父さん。」見るとパンツが全然ないんです。「姉ちゃんが始まつたとか。」私は鯛を買つてきて、塩焼きして、赤飯の炊き方を知らないから、近所の奥さんたちに習つて、そして仕事が終わつてから。だまつて置いておけばいいんです。娘は理解できるんです。「あ、お父さんは私が始まつたの知つてるね。」それでいいんです。でも私はばかだから、一つ余計なことを言つた。「たかえ、始まつたとやね。おめでとつ。」たかえにとつては余計なお世話です。彼女は私の顔をじつと見て、ぼろぼろと泣いて「母ちゃんがほしか」と二度言いました。あれは、私に飛びついてたかと思つたのか、私に飛びついてきました。かわいそうとか、あわれとか、その時はそんなことわかりませんでした。「なんてはかな父親だろう。」後でよその奥さんに聞いたら、「当たり前やんかね、なんで娘さんが父親にそがんこと言っね。よくそれで娘さん育ててきたね。」と言われました。

それから娘はいわゆる「非行少女」になりました。「人をいじめてはいけません。物を盗っちゃいけない。仲良くしなさい。」それは守つてくれました。ただ、本人が「シンナーだったら」と思つたのか、シンナーをやつたんです。また私、頭が変になつて「今度は死ぬわけにはいかない。家も子どももいる。」いろんな葛藤があつて、そして最後には「よし、もう人間を止めよう。人間が持つてゐる見栄とか、体裁とか、恥とか、そんなのを全て投げ捨て、親や、近所の人や、誰からなんて言われたつていい。」腹を決めたんです。「このまま俗に犯されてたまるか。国にお願いしよう。」巡査部長に相談しました。彼は教育的で、この前家に来て、その時の話をしてほろほろ泣くんですよね。「こみね、おまえもやつぱり親やね。私があの時、若い巡査を連れていつた時、こみねは泣きながら娘を殴つていた。」私は今までお巡りさんが殴つたと思つていたんです。お巡りさんは「なんで私が他人の娘を殴らないけんとか。殴つたのはおまえだ。」と言われたんです。たかえはその時「痛い」も何も言わなかつた。そして合計四回つかまるんです。他の連中は「もつたかえとはシンナーせん。わいとシンナーすると必ずつかまるとやけん。」といつて離れていつた。私がちくつたり、お巡りさんが注意して巡回してくれたり。そしていよいよ松山の平和公園の裏にあるいわゆる少年院に預けることになつたんです。裁判官がいて、書記がいて、被告席に被告が立たないで座つて、その後ろに私が座つています。「たかえちゃん、あなたはお父さんのもとでは立ち直ることができないので、国が三週間預かります。それでも治らない時は、最終的には少年院送りになるんです。」彼女はね、ワーッと泣いて後ろを振り向いて「お父さん助けて」つていうんです。私がちくつてゐるわけですからね。はつきりいつて胸が痛くてしかたがない。裁判が終わつて外に出ると、墨塗りの公用車が止まっています。そこまで制服を着た女の人が、逃げないように両手を縛つて連れていくんです。何回か「父ちゃん、助けて」つて言うんです。家に帰るとやつと弟と妹を見れる。たかえのところだけが豊なんです。それを見たおとんにゃかみたいに「たかえこめん。たかえこめん。」朝まで泣いてました。

私はこんな話、はつきりいつてしたくない。でも、被爆の実体験を語れる方は、はつきりいつても名くらしいじゃないんです。私も心臓が悪いんです。もつと死んでもおかしくない。そんななかで、さつき先生から紹介された「枯らすだけでいいのだから。もつと真剣に、

核のことは今からあなたがたが考えなくちゃいけない。」もう現に核は使われています。劣化ウランが。これは戦車砲に使われています。通常の戦車砲の三倍の貫通力があるんです。湾岸戦争にも使われていました。いろんなところでアメリカはNATOの名のもとに、劣化ウラン弾を使っているんです。今、イラクの子ども達、放射線ガンではたばた死んでいます。今、世界には私もはっきりしたことは言えませんが、約200万人の被害者がいるんです。アメリカはね、自国の核実験のために、自国の兵隊を使っているんです。ソ連だっていっしょです。そして火傷するまでは実験しないんです。そこでいろんな検査をしています。チェルノブイリってそうです。その時8万人の人がかりだされた。その中で旧ソ連はひたすら隠して、

この前、広島大学のふなはし先生が政府の調査に行きました。はっきりいって半分は亡くなっているんです。18年間で。そして生きているほとんどの人が私と一緒にです。仕事がない。というところは収入がないから、妻も子どもとれない。そんな状態で、現在はその親すらいない状態なわけですから。彼らは今、最低限度の生活をしてると思うんです。政治のことは話したくないんですけど、この前、ガイドライン法を日本は受けました。アメリカは「後方支援だからいい」と言います。じゃあ、広島はどうなんですか。後方支援なんかじゃないでしょ。もつと遠いところじゃないですか。今の日本の政府は弾道弾が何処まで飛ぶのか知ってるのかと言いたくなりますよ。「後方支援だからいい」そんなはかなことありますか。私そんなことに腹が立つんです。

そんな中でやつぱり一人でも多く、原爆の悲惨さを知ってほしいし、そしてあなたがたは世界の六十億人々と一緒にあって、核の開発、拡散、そして核そのものの廃絶を行っていかなければ、また私のような被害者をあなたがたがつくることになっては困るんです。私の子ども孫、ひ孫、そういったものが私たちのような被害者に絶対になってほしくない。ほとんどの被害者は「何が一番つらかったですか。」の問いに「被爆したそのものがつらいんだ。」と言うでしょう。

小峰 秀孝 (こみね・ひでたか)

一九四〇年十一月長崎市西郷狩股（現在錦町）に生まれる。四五年八月九日原爆に被爆し、両手・両足・腹に火傷を負い、足のケロイドを三回にわたり手術。一九五五年西浦上中学校を卒業後、理容院で見習い奉公をしながら長崎県立理美容学校を卒業。五九年理容師国家試験に合格。六八年長崎市音無町に「理容こみね」を開業し現在に至る。仕事のかたわら被爆者としての「語り部」活動をつづけ、一九九六年八月「じいちゃん その足どげんしたと」を自費出版。二月、第二回「平和・協同ジャーナリスト基金」奨励賞を受賞。現長崎原爆青年乙女の会事務局長。

※ 本稿は二〇〇一年六月十三日に長崎大学で行なわれた講演記録である。

テープ担当 黒野 裕也